

監修

高木市之助
山岸德平

久松潜一
小島吉雄

芭蕉句集

山崎喜好
穎原退藏校註
増補

朝日新聞社刊
日本古典全書

鵜原退藏（えばらたいざう）

明治二十七年長崎縣生。昭和二十三年歿。大正十年京都大學國文學科卒業。京都大學教授。主著「江戸文藝論考、芭蕉俳句新講（上・下）」、校註・日本永代藏、校註・世間胸算用、江戸時代語の研究等。

山崎喜好（やまざききよし）

明治四十一年廣島市生。昭和三十三年歿。昭和九年京都大學國文學科卒業。滋賀大學、大阪女子大學教授。主著「俳諧の國、鬼貫論、芭蕉と門人、芭蕉と初心、三田淨久等。

日本古典全書

「芭蕉句集」

鵜原退藏校註
山崎喜好增補

昭和三十三年三月二十日初版發行

昭和四十三年六月三十日第四版發行

印刷所 凸版印刷株式會社

發行所 朝日新聞社（東京都千代田

區有樂町・大阪市北區中之島・

北九州市小倉區砂津・名古屋市

中區榮）

定價 五〇〇圓

目次

解説

芭蕉俳句における作風の變遷……………三

署名……………一三

芭蕉俳句の總句數……………一五

句集・註釋書など（すべて明治以後）……………一九

凡例……………二六

本文

新年……………二九

春……………三七

夏

時 候……………七
 天文・地理……………三
 人 事……………三

動 物……………五
 植 物……………五
 雜……………三

八

秋

時 候……………三
 天 文……………六
 地 理……………七
 人 事……………一〇

動 物……………三
 植 物……………三
 雜……………一四

一四

冬

時 候……………四
 天 文……………五
 人 事……………一六

動 物……………三
 植 物……………七
 雜……………二〇

二四

時 候……………四
 天 文……………九
 地 理……………六
 人 事……………八

動 物……………〇
 植 物……………四
 雜……………一六

雜……………二六三

存疑の部……………二六七

春……………二六七

新 年……………二六七

時 候……………二六八

天 文……………二六九

人 事……………二七〇

夏……………二八四

時 候……………二八四

天 文……………二八四

地 理……………二八六

人 事……………二八六

秋……………二九四

時 候……………二九四

天 文……………二九六

地 理……………三〇一

人 事……………三〇一

動 物……………三〇三
植 物……………三〇五
雜……………三〇八

動 物……………二八八
植 物……………二九〇
雜……………二九三

動 物……………二七三
植 物……………二七四
雜……………二八三

冬.....三〇九

時 候.....三〇九

天 文.....三一

地 理.....三五

植 物.....三九

動 物.....三八

人 事.....三五

雜.....三一

索引

誤傳の部.....三五

引用書目索引.....三六

俳句索引.....三六

芭蕉句集

山 瀨

崎 原

喜 退

好 藏

解 説

芭蕉俳句における作風の變遷

本書の編集方針は四季類題別の形式をとつてゐて、年代順に掲げたのではない。しかし、芭蕉の俳句の作風には幾つもの變化があつて、決して一樣ではなかつた。また、初めから芭蕉獨自のものを作り出してゐたのでもなかつた。彼ほどの人物でも、若き日には貞門、談林の感化を強く受けてゐた。さうした推移の大體がうかがへるやうにとの用意から、實は原典の署名までも、新しく記してみたのである。かくして、たとへば宗房とあれば貞門の影響を受けてゐた時代、桃青とあれば宗因風に心酔してゐた時代、を示すであらう。本當に蕉風らしい作風になつて來るのは、芭蕉と署名する頃になつてからだが、この時期にもまた風調の變遷があつた。新しみを求めるのに瘦せたといはれる芭蕉であつてみれば、これもまた當然至極のことではあつたが、あくまでも一ヶ所に停滯せず、一應完成した美にも甘んじ醉ふことがなかつた。

今、略年譜を掲げて、貞門から談林、談林から蕉風へと推し移つていつた跡をたどつてみよう。集の名

や、作品などは、特に記すべきもののみにとどめる。

正保元年（甲申） 西紀一六四四 一 歳

伊賀上野に生まれた。宗房はその名である。

承應二年（癸巳） 一六五三 十 歳

およそこの頃から藤堂新七郎家の主計良忠に仕へた。良忠は俳號を蟬吟せんぎんといひ、貞門風の俳諧を好んでゐた。

明暦二年（丙申） 一六五六 十三 歳

二月、父歿す。

明暦三年（丁酉） 一六五七 十四 歳

この年「いぬとさるの世の中よかれ酉の年」があつたといふが、否定説もある。

寛文四年（甲辰） 一六六四 二十一 歳

九月、重頼撰「佐夜中山集」刊。松尾宗房は二句入集、これが物の集に見える最初である。

寛文五年（乙巳） 一六六五 二十二 歳

十一月、貞徳十三回忌追善の百韻が催され、宗房も一座した。その立句は蟬吟である。

寛文六年（丙午） 一六六六 二十三 歳

四月二十五日、蟬吟歿。二十五歳。その後芭蕉は依然として藤堂家に仕へたとする説、二君に仕へるのを避けて京に出たといふ説、があるが、思ふに上洛して北村季吟に和學を學んだか。

寛文七年（丁未）

一六六七

二十四歳

十月、季吟撰「續山井」刊。伊賀上野宗房として付句三、發句廿八入集。「耳無草」に一句入集（勝峯晋風氏による）。

寛文十年（庚戌）

一六七〇

二十七歳

六月、大和住岡村正辰撰「大和順禮集」に伊賀住として發句二入集。

寛文十二年（壬子）

一六七二

二十九歳

一月二十五日、郷里伊賀上野の天満宮に「貝おほひ」奉納。句合で判者は宗房。浮世風の氣味が強い。

この年、江戸に下る。留別吟として「雲と隔つ友に（イカ）や雁の生き別れ」があつたと。（芭蕉翁全傳）江戸では俳號を土糞といつた（同）。幽山の執筆をつとめた（眞澄の鰻）とも、ト尺の帳役の手傳ひをした（芭蕉翁系譜）ともいふ。

延寶初年までは貞門系の俳書にその作が見えるが、まづ以上が貞門風の時代といへよう。

姥 櫻 さ く や 老 後 の 思 ひ 出 （佐夜中山集）

これは謠曲實盛「老後の思ひ出これに過ぎじ」によつた。

降 る 音 や 耳 も 酸 う な る 梅 の 雨 （續山井）

これは梅・酸の縁語仕立より成つた。

しばし間も待つやほとゝぎす千年 （續山井）

時鳥から數千年に掛けた。概して作意が弱い。

芭蕉句集

寛文十三年(癸丑)
延寶元年

一六七三

三十歳

九月、改元。

延寶三年(乙卯)

一六七五

三十二歳

五月、東下の宗因を迎へて百韻があつた。すでに桃青と名乗り、参加した。

露沾に「五十番句合」あり(句解参考)。嵐蘭入門。

延寶四年(丙辰)

一六七六

三十三歳

春、信章(素堂)と兩吟百韻二卷があり、「江戸兩吟集」または「奉納二百韻」と題した。

梅の風俳諧國にさかむなり 信章

こちとうづれも此時の春 桃青

「梅の風」とは梅翁宗因の俳風のこと、貞門を脱してこれに傾倒したさまがうかがへる。

六月二十日、伊賀に歸り、秋、東武に下る。蝶々子撰「俳諧當世男」刊。

延寶五年(丁巳)

一六七七

三十四歳

風虎主催「六百番俳諧發句合」あり。冬、桃青「あら何ともなや」を立句として、信章・信徳と三吟百韻。

延寶六年(戊午)

一六七八

三十五歳

右に二卷加へ、「江戸三吟」刊。二葉子撰「江戸通り町」、言水撰「江戸新道」、不卜撰「江戸廣小路」等刊。

十月、十八番句合の判者となる。坐興庵桃青と署名し、素宣の印を用ひた。

十一月、京の春澄撰「江戸十歌仙」刊。

延寶七年（己未）

一六七九

三十六歲

宗匠となる記念の萬句興行があつたのはこの頃か。言水撰「江戸蛇之鮓」、蝶々子撰「玉手箱」、才磨撰「坂東太郎」刊。桑折宗臣「詞林金玉集」成る。

以上が宗因風・談林風に屬してゐた時代である。

内裏雛人形 天皇の御宇とかや（江戸廣小路）

一句は謠曲杜若「仁明天皇の御宇かとよ云々」による。もちろん、人形天皇は仁明天皇のもぢりだが、その御代といつた所は機智に富んだ見立である。ここに貞門と違つた華やかさ——文學的にはまだ淺いにせよ——があつた。

あら何ともなや昨日は過ぎて河豚汁（江戸三吟）

「あら何ともなや」は、何だ馬鹿々々しいの意で、これまた謠曲に多く用ひられてゐる。謠曲の詞章取りの例は早く貞門時代に見られ、今にはじまつたのではない。しかし、談林時代には謠曲は俳諧の源氏物語として尊ばれ、盛んによみこまれたのであつた。

天鈿や京江戸かけて千代の春（當世男）

「天秤」に「掛けて」は縁語仕立であり、これまた今にはじまつた手法ではない。しかし、よまれた題材なり、趣向なりがひどく當世風であつて、そこに貞門と異なるものがある。

延寶八年（庚申）

一六八〇

三十七歳

四月、「桃青門弟獨吟二十歌仙」刊。杉風・嵐蘭・嵐雪・其角等の獨吟を収めた。附句中に「桃青の園には一流ふかし」とある。九月、「俳諧合」成る。其角の田舎の句合、杉風の常盤屋の句合より成り、判者は桃青で、村々齋・華桃園の別號も用ひた。杉風の句合には跋を記し、俳諧の新しみにここにありと述べてゐる。冬、深川に隱栖す。これまでは市中の船町住であつた。

延寶九年（辛酉）

一六八一

三十八歳

三月、高政撰「ほのぐ立」（假題）に、常風の句として「枯枝に鳥とまりたりや秋の暮」入る。春、門人李下より贈られた芭蕉を植ゑたのはこの頃か。

言水撰「東日記」刊。七月、芭蕉らに「俳諧次韻」があつた。ここにも老莊思想の影響が見られる。九月、改元。

天和二年（壬戌）

一六八二

三十九歳

三月、千春撰「武藏曲」刊。季吟序。芭蕉庵桃青、芭蕉の署名が見える。十二月二十八日、駒込より出火。本所深川に延焼し、芭蕉庵も類焼した。甲斐に避難。佛頂に參禪したのもこの頃であらう。

天和三年（癸亥）

一六八三

四十歳

甲斐滞在中か。五月、其角撰「虛栗」に跋を記し、李白・杜甫・白樂天の漢詩、寒山の禪味、西行の和歌を慕ふ心を述べてある。

六月、母歿。

四十前後で、六十有餘の老人のやうに見えたといふ（老の樂しみ）。

以上が蕉風時代の前期で、老莊思想・漢詩の感化が強い。

憶^フ老杜^ヲ—

髭風ヲ吹いて暮秋歎ズルハ誰ガ子ゾ （虛 栗）

しかも、字餘りの例が多い。また、この句のやうに「風髭を吹いて」とあるべきを、ことさらに倒置するなど、衒ひが見える。

天和四年（甲子）
貞享元年

一六八四

四十一歳

二月、改元。

八月、江戸を立ち、上方に向かふ。千里^{ちり}同行。途中での作「道の邊の木樅は馬に喰はれけり」について、門人許六は正風體の初めとした（歴代滑稽傳）。その他、佳吟が多い。伊賀上野に歸り、その後、名古屋で「風の身は竹齋に似たるかな」を巻頭におき、「冬の日」成る。郷里にて越年。

貞享二年（乙丑）

一六八五

四十二歳

伊賀上野より、奈良・京・大津・水口・熱田・鳴海を経て、甲州に入り、江戸着。紀行文を「甲子吟行」、「野晒紀行」、「草枕」などと呼ぶ。

貞享三年（丙寅）

一六八六

四十三歳

正月、初懷紙百韻に一座したのみでなく、前半の五十韻については自ら註を加へた。當時の附合が新しすぎて分りかねるといふので、ある人から説明を求められたのによる。附味は深みを加へ、田園的なものに強い關心を拂つてゐたことなどが知られ、貴重な文獻である。

閏三月、仙化撰「蛙合」刊。深川の芭蕉庵での衆議判で、芭蕉一人の判でないところに、從來と異なる點があり、また、成長もある。「古池や蛙飛び込む水の音」が入るが、この春の作であらう。七月、荷兮撰「春の日」刊。

貞享四年（丁卯）

一六八七

四十四歳

八月、月見のため鹿島に赴き、「鹿島紀行」（鹿島詣）成る。

秋、「叢虫の音を聞きに來よ草の庵」あり、素堂が哀れがつて「叢虫の説」の文を作る。芭蕉はさらにその跋を書いた。共に老莊的に無爲自然を楽しむ心が強い。

冬、不卜の「續の原」冬の部の判詞、並に跋を記す。其角撰「續虛栗」刊。

上方の旅に出、郷里にて「ふる里や臍の緒に泣く年の暮」があつた。

貞享五年（戊辰）
元祿元年

一六八八

四十五歳

二月、伊勢神宮参拜。さらに吉野・高野山・和歌の浦・奈良・須磨・明石を経て京に入る。杜國同行。この時の紀行文が「笈の小文」である。五月より六月初めまで滯浴。瀬田の螢を見、岐阜にて鵜飼見物をし、鳴海に入る。八月十一日、越人と共に更科の月見に行き、「更科紀行」が成る。九月十三日、芭蕉庵にて後の月見の會があつた。九月三十日、改元。

十二月、深川八貧の句があつた。